

ヨーロッパ学会旅行記

村上 まどか

1. 拠点はイタリアのシエナ

1.1 なぜシエナに？

2010年4月から一年間、私がシエナ大学客員研究員として住んでいるシエナ（Siena）は、中世に金融業で栄えた世界最古の銀行を有する都市であり、美しい扇形のカンポ広場を中心に、シエナ（赤茶）色の街並みが広がっています。扇形の付け根には、市庁舎を横に抱いてマンジャ（食）の塔がそびえ立っており、私は今、ちょうどその裏側のアパートに住んでいます。



カンポ広場の西側には、内部はシエナ派絵画の宝庫で

あり、外観は華麗な装飾を施し



た白大理石のまぶしいドゥオーモ（大聖堂）が建ち、シエナが聖母マリアに捧げられた都市であったことを物語っています。¹

英語教師である私がなぜ留学先をイタリアにしたのか — それは、シエナ大学には生成文法の大家にして言語学的な関心の対象を私と同じくする、ルイジ・リッツィとアドリアナ・ベレッティという教授夫妻²がいるからであり、彼らの薫陶を受けながら英語のみならずヨーロッパ諸言語の研究をすすめ、ヨーロッパの学会に積極的に参加しようと考えたからです。³

1.2 私の研究 — 動詞移動

動詞移動と聞いただけで、英語では疑問文を作るときに動詞（助動詞）が文頭に動くことかしら、と思った人はきわめて正しいのですが、ここでは副詞と動詞の位置関係に着目してみましょう。

- (1) a. John always loves Mary.
 ジョンは いつも 愛する メアリを
- b. *John loves always Mary.
 ジョンは 愛する いつも メアリを

(1b) の文頭に付けた * マークは、この文は不適格、不可であるという印です。英語は (1a) の語順でなければなりません。ところがイタリア語では、

- (2) a. *Gianni sempre ama Maria.
 ジャンニは いつも 愛する マリアを
- b. Gianni ama sempre Maria.
 ジャンニは 愛する いつも マリアを

このように、英語とは逆の語順が適格で、(2b) のほうが正しいのです。フランス語でもこの語順が正しいことが、この論題ではよく知られています。

- (3) a. *Jean toujours aime Marie.
 ジャンは いつも 愛する マリーを
- b. Jean aime toujours Marie.
 ジャンは 愛する いつも マリーを

これは一応、フランス語とイタリア語では、「いつも」に相当する副詞を、動詞が右から左へ飛び越えて動けるのに対し、英語ではそのように動詞が動けないからだと説明されています。

ほかの言語ではどうなっているのでしょうか。2000年にギリシアのアリストテレス大学で学会発表の機会を得た私は、ギリシア語ではどうなのか調べてみました。

- (4) a. O Janis panta agapa ti Maria.
 ヤニス いつも 愛する マリアを
- b. O Janis agapa panta ti Maria.
 ヤニス 愛する いつも マリアを

ギリシア語では人名にも o や ti の定冠詞が付くことは論外として、なんと (4a)(4b) のどちらの語順でもかまわないのです。それならば、(4a) では動詞は動かないでいて、(4b) では動詞が副詞を飛び越えて動いているといえばよさそうですが、動詞移動の規則は一律に適用しているのが望ましいので、(4a)(4b) とともに動詞は動いているのであり、「いつも」に相当する副詞の修飾する位置がギリシア語では自由なのだ、と言い抜けることにします。すると言語は、

① 英語型 副詞は動詞の前。動詞は動かない。

② フランス語型 副詞は動詞の後。動詞は動く。

③ ギリシア語型 副詞は動詞の前か後。動詞は動く。

という3つのパターンに分けられることになります。⁴

私には一応、これがどうしてそうなのかという動詞移動の持論⁵があるのですが（第4節参照）、ギリシアを機に、行き先の言語を研究して自説がその言語でも有効であると学会で発表するのは楽しいことだと味をしめました。そして今年、私はリトアニアとポーランドの国際学会で研究発表の場を与えられました。

はてさて、リトアニア語とポーランド語では、動詞移動はどうなっているのでしょうか。

2. リトアニア

2.1 首都ヴィリニウス

1991年にソ連から独立したリトアニアは、再出発した共和国としては若いですが、14世紀からリトアニア大公国として、ロシアとポーランドのはざままで揺れ動きながらも独自の文化を形成してきました。ヴィリニウス（Vilnius）観光の拠点は目抜き通りの端にある大聖堂と鐘楼で、近隣にさまざまな様式の教会もひしめいており、ガイドブックによれば敬虔なカトリックの国だそうです。が、現地ガイドによれば信仰心は薄くなる一方で、今や教会は宗教以外の目的の集会や、博物館として使われることも多いそうです。



市街を見渡せる丘が2つあり、私は2つとも登りましたが、ひとつの頂上にはゲディミナス塔というかつての城壁、現在は博物館・展望台があり、もうひとつには、磔になった3人のフランシスコ派僧侶の伝説にちなむ3本の白い十字架がありました。

2.2 第43回欧州言語学会

ラテン語でSocietas Linguistica Europaea（略称SLE）と称する学会が2010年9月2~5日にヴィリニウス大学で開催されました。総勢300人以上が集いましたが、研究発表のみならず、道案内、配布物、飲食物、観光、といった細かいところまで入念に運営されていて、快適な楽しい学会でした。



私の発表は*Verb Movement: The Contrast between English and Lithuanian*という題目で、初日になんとか普通に終わらせました。未知なる言語の動詞移動の研究方法は、まず入門書⁶をひもとき、動詞の活用形、仮定法・命令法、否定文・疑問文、そしてもちろん副詞と動詞の位置関係について注目しながら通読します。それから専門的論文を読んでいくのですが、リトアニア語の生成文法的文献の見つからないこと！ かつてリトアニア語は、インド・ヨーロッパ祖語に最も近い姿をした骨董品のような言語として歴史言語学者の関心の的だったらしいのです。それが本当ならば、なぜ生成文法家の研究対象にはならないのだろうと私はいぶかりながら、仕方なく論点が少しずつれている論文も、リトアニア語と題に入っていれば何か得るものはないかと斜めに読みました。それから学会運営委員のリトアニア人にインフォーマント（母語について言語学的な質問に答える人）になってもらい、文献に載っている例文や自分でこしらえた文について、適格か否かをメール交換で確認しました。—さて結果は？

- | | | | | |
|--------|-------|--------|--------|---------|
| (5) a. | Jonas | visada | myli | Marija. |
| | ヨナスは | いつも | 愛する | マリヤを |
| b. | Jonas | myli | visada | Marija. |
| | ヨナスは | 愛する | いつも | マリヤを |

リトアニア語は、ギリシア語と同じパターンでした。動詞移動はしているはずですが、副詞の位置は自由なものでした。ただし、(5a)の語順のほうが圧倒的に普通であり、(5b)は少し変だ、ぎこちないと言うリトアニア人もいました。けれども「少し変」なのはともかく、文法的に間違っていないことが重要です。

- | | | | | |
|--------|-------|-------|--------|-------|
| (1) b. | *John | loves | always | Mary. |
| | ジョンは | 愛する | いつも | メアリを |

という語順は、英語ではありえないのですから。

研究発表はパワーポイントを使って動詞を右から左に動かしたり、助動詞 *do* を挿入したり、と工夫を凝らしたつもりです。発表後には「なぜリトアニア語を研究したのですか」という簡単な質問が出て、「言語理論は、説明できる言語の数が多いほど優れた理論だといえますから、リトアニア語も私の理論で解決できることをこの学会で示したかったからです」と答えました。が、先入観を抱きながら研究するのもいけないだろうかと思います。「調べてみましたが、自説ではこの言語の動詞移動を解き明かすことはできませんでした」と、学会で公言せざるをえない日も来るかもしれません（その場合は、英語について重点的に説明するしかありませんね）。

2.3 トウラカイ

閉会式の行なわれた最終日の午後、学会の企画によるバスツアーに参加しました。ヴィリニウスから30キロほど離れたトウラカイ（Trakai）という、森と湖に囲まれた赤レンガ色の古城の観光地を訪れたのです。14~15世紀にトウラカイ城は首都がヴィリニウスに移る前の古都として繁栄しましたが、ポーランド軍に荒らされて廃墟となっておりました。



写真のように復元されたのは20世紀後半のことだそうです。ガイド付きで中に入り、説明を受けたり展示物を見たりしました。

ここでの名物料理はキビナイという「トウラカイ版肉まん」ですが、丸くはなくナマコ形をしており、ふわふわの白い皮ではなく、硬くて薄い甘くないパイ皮がてっぺんで編んだように継ぎ合わされ……で、お分かりいただけるでしょうか。中には胡椒のきいた肉や野菜が入っており、安くて味が濃くお腹にたまる若者向け軽食でした。が、リトアニアで最も印象的な食べ物は、学会の昼食で供されたシャルティバルチェイというショッキングピンクの冷製スープで、ビーツ（赤カブ）と牛乳を混ぜてそのような色になっており、ネギのような香草野菜がみじん切りで入っていました。味は見た目よりもずっと普通でおいしかったので、ビーツの缶詰が手に入れば日本でも作ってみたいと思いました。

リトアニアの特産物のひとつに琥珀がありますが、トウラカイの出店は、

信じられないほど安い琥珀のアクセサリーを、山積みで何種類も売っていました。たとえば短いネックレスが12リタス（1リタス=約32円）で、街の宝飾店や空港の店では同じデザインのが40リタスでしたので、女友達に気軽に配るお土産としてまとめ買いするならトゥラカイの出店がおすすめです。でもまさかプラスチックってことはないでしょうけれども、品質に保証はありません。

3. ポーランド

3.1 ポズナンからグニェズノへ



ポズナン（Poznań）はポーランド王国の最初の首都であり、古くから商業都市として栄えたそうですが、世界史上「ポズナニ事件」⁷が起きた地として知られています。学会前日に到着し、夕方に街を歩いてみました。写真は旧市街広場から市庁舎を臨む1枚と、右の写真は内部に絵画・彫刻が豊

かに施された聖スタニスラウス教会です。

翌日は、学会の手配した団体バスで会場に向かいました。国民的詩人の名を冠したアダム・ミツキェヴィチ大学は、ポズナンに主要キャンパスがありますが、東に50キロほど離れたグニェズノ（Gniezno）にも宿泊設備を備えたキャンパスがあり、学会はそこで行なわれたのでした。

3.2 第41回ポズナン言語学大会

9月23日~26日に開催されたPoznań Linguistic Meeting（略称 PLM）は、会場に到着するとまずは受付と昼食でしたが、昼食時から論文で読んでメール交換していた人たちと会って話すことができました。グニェズノは小さな町ですが、会場周辺には大聖堂を臨める湖畔の散策路がありました。



私の発表は初日の1番とは以前から承知していましたが、直前に知ったこ



とには、発表の中で言及するポーランド人教授が司会者
 なのでした! ほかに私が読んでいたポーランド語に関
 する論文の著者たちを含んだ聴衆が得られ、質疑応答に
 も手ごたえが感じられて満足しました。

演題は*Verb Movement: The Contrast between English and Polish*で、研究方法はリトアニア語の場合と同様、入門書⁸
 から始めて、専門的文献へと読み進めます。リトアニア
 語と違って、ポーランド語は生成文法の文献も豊富だっ
 たので、助かったような悩まされたような……でした。

それにしてもポーランド語は、なんと動詞の語尾が遊離して、動詞より前
 (後は不可)にある別の単語にくっつくことができるという、奇妙奇天烈な
 言語です。次の例文の一群を見た時には、ホントかしらと目を瞠り、研究仲
 間に吹聴したい衝動に駆られましたが、同様に思ったのは私だけではないよ
 うで……(以下ミグダルスキ⁹の著書232ページから引用、拙訳)。

- (6) a. My znowu wczoraj poszli-śmy do parku.
 私達は また きのう 行った-1人称複数語尾 に公園
 「私達はきのうもまたその公園に行った。」
- b. My-śmy znowu wczoraj poszli do parku.
- c. My znowu-śmy wczoraj poszli do parku.
- d. My znowu wczoraj-śmy poszli do parku.
- e. *My znowu wczoraj poszli do parku-śmy.

「これらの例文は何人もの書き手によって何度となく引用されてきたが、容
 認度は母語話者によって異なる。私自身も含め私の周囲のポーランド人には
 (6d)は容認できないし、(6c)もznowuが強調されなければ適格とはいえない。
 結局のところ、遊離語尾の最もふさわしい位置は(6b)だけである。」

というわけで、母語話者に確認する作業は大切です。¹⁰ そのためにも、リ
 トアニアもポーランドも、先方の国の人たちと言語学を通じて知り合うこと
 ができたのは大きな収穫であり、これが国際学会の醍醐味であるといえます。
 —そうそう、ポーランド語の動詞移動のパターンは?

- (7) a. Jan zawsze kocha Marię.
 ヤンは いつも 愛する マリアを
- b. Jan kocha zawsze Marię.
 ヤンは 愛する いつも マリアを

ポーランド語もまた、どちらでもOKなギリシア語型でした。

3.3 首都ワルシャワ

3.3.1 ショパン博物館

学会を後にした私は、列車でワルシャワ（Warszawa）に向かいました。ワルシャワ中央駅到着がお昼時だったので、ガイドブックに載っていた駅近辺の和食店¹¹で昼食を済ませ、共産主義の象徴である文化科学宮殿（右の写真）の向かい側のホテルにチェックインした後、街へ繰り出しました。



3年前に本学合唱部の顧問を仰せつかったのを機に、少女時代に挫折したピアノを再開していた私は、まずはピアノの詩人フレデリック・ショパンの博物館（下の写真）に行ってきました。ショパン生誕200年の今年にリニューアルされたこの博物館はハイテクの殿堂という噂でしたから、入場料20ズウォティ（1ズウォティ＝約28円）を払い、操作用カード5ズウォティ（カードを返すと返金）を預けてワクワクしながら入場しました。カードは、それぞれの箇所ですwitchにかざすと音声・映像が始まる、という説明でした。



入場してからすぐに、10個ぐらいの物品のシルエットを見て、この博物館内にあるかないか当てる、というクイズがありました。グランドピアノなどは簡単ですが、小物入れ（実はキャンディーボックス）は少し迷って、「ある」で当てました。かなり奥にあった実物は直径10センチぐらいの真ん丸な金属製の入れ物で、ふたの真ん中に幼女が横向きに立っている浮き彫りがありました。

自筆楽譜、手紙、写真、等々を見ながら進んでいくうちに、英語の説明が少ないと私は思い始めました。ある一室は、ワルツ、ノクターン、マズルカ、ソナタ、エチュード、ポロネーズ等の種類別にデスクが分かれた一種のジュークボックスで、カードでswitchを入れて曲を選ぶとヘッドフォンから音楽が、机上のノート型スクリーンにはポーランド語でその説明が出るのです。でもシルエットのクイズは英語でしたし、英語の説明も若干はあったし、グランドピアノの譜面台に選んだ楽譜を置くと、

スクリーンにピアニストの手が映ってその曲が流れ出る（「別れの曲」ほか全3曲）、のような装置には言葉は不要だったので、私は一時間も気づかずにいたのです。

「ショパンをめぐる女性たち」の一室は、音声も画面もポーランド語だったので、ついに近くの博物館員に「ポーランド語はわかりません」とこぼすと、「あ、英語のカードありますよ、お取り換えしましょう」と、首から何枚もぶら下げたカードから1枚差し出してきました……！ これでようやく、恋愛関係にあった男装の作家ジョルジュ・サンドや、パリの病床に訪れ最期をみとった姉ルドヴィカの説明は、英語で聞くことができましたが、それはもう、博物館の出口に近付いたころだったのでした。

3.3.2 ワルシャワ中心部

それから私は目抜き通りを歩いて街の中心部に向かいました。写真は、人魚の像が中心にある旧市街市場広場、16世紀末ワルシャワ遷都時の旧王宮、そしてバルバカンと呼ばれる円形の砦です。どれも起源は古いのですが、どの建造物も第2次世界大戦ですさまじい戦禍を被ったので、どれもが戦後の復元です。



なにしろポーランドは昔から戦争に弱い国で、18世紀後半には周辺諸国により3度にわたる国土分割の憂き目にあい、1918年、約120年ぶりに独立を回復するも、先の大戦ではほとんどナチス・ドイツの占領下だったのでした。そのような歴史を経て、現代においてもたいていのポーランド人は熱烈な愛国者だと話していた故・千野栄一スラヴ系言語学者の講義を思い出します。

街の中心で私は旅行案内所に入り、翌日に約50キロ離れたジェラズヴァ・ヴォラ村にあるショパン生家へ行く段取りをつけようと思いました。ガイドブックによればバスが1日2便あるので、バス停と時間を尋ねに入ると、「ショパン博物館の前から10時と12時にバスが出ていて、それぞれ15時と17時に

帰ってくるのが一番簡単ですよ。料金も一般のバスと、そう変わりません。予約しなくてもよいのですが一応予約しては……」と、電話番号等、書いてくれました。「ポーランド語できないので、10時のを1席、電話して予約してくださいませんか」と言う。「英語で大丈夫ですよ」と言われたので、予約しないで10時に行って、満席だったらその場で12時のを予約して国立博物館を見に行ってください、と夕飯を食べながら考えました。

学会の食事でポーランド風餃子「ピエロギ」やジャガイモのパンケーキ「ブラツキ・カルトフラーネ」といった庶民的料理は食べていたので、この日の夕飯は、前菜はニシンのマリネ、メインはアヒルのロースト・ベリソースがけと洒落こんでみました。お酒も学会ではワインとビールだったので、ポーランドのウォッカ「ズブロッカ」を試してみましたが、やはり私にはアルコール度の高い蒸留酒よりも、味わい深いワインのほうが良いと思いました。

3.3.3 ショパン生家に行きそこなった話

翌朝、私は10時前にショパン博物館に到着し、バスを待ちました。10分も過ぎたのに来ないので、そこにいた男女に尋ねると、「私たちもそれを待っているのですが……場所はここでもいいはずですよ。今日は路上でマラソン大会をやっているのでバスが遅れているのではないかしら」と言うので、もうしばらく待っていました。20分以上過ぎたので「予約なさいましたか、私はしていません。予約が1件もない場合、バスは来ないのかもしれませんが、彼らも私もあきらめ、私は国立博物館を見て12時に戻ってくることにしました。(ショパン博物館は11時開館なので、館員にきくことはできませんでした。)

ところが近いはずの国立博物館が、どうしたことか入口が見つからずに迷ってしまい、ようやくたどりついたときには11時近くになっていました。でも早く着いたとしても無駄でした、往年のガイドブックには10時開館と書いてあるのに、12時開館になっていたのです。そこで私は、これはもうショパン博物館に戻って12時のバスを予約してから、売店を見たりお茶を飲んだりしてしよう、とUターンしました。

「ショパン生家行きの12時のバスに乗りたいのですが」とチケット売り場の館員に切りだすと、そのバスはもうやっていない、旅行案内所の情報が間違っている、と言うではありませんか!「そこへ行くには、中央駅が最寄駅

からソハチェフ行きの電車に乗って、そこで降りたら6番バスに乗り換える、バス停は駅のすぐ近くです」と書いて教えてくれました。「今日はもう、それしか行く方法はありませんか?」「はい残念ながら……もちろんタクシーでも行けますが」「1時間以上かかりますよね。」

私はベンチに腰をおろしてしばらく思案しましたが、今日はまだ何も実りがないのに、時刻表も現地語もおぼつかないまま冒険するのもね～、これはもう、エチュードのひとつでも弾けるようになってから出直しなさいというショパン様の思召しかしら、と結論づけ、午後は徒歩圏のワジェンキ公園と国立博物館に行くことに決めました。

3.3.4 ワジェンキ公園と国立博物館

ワジェンキ公園は、花と緑の豊かな、広大な美しい公園でした。ショパン像(下の写真)もさることながら、ワジェンキ宮殿(右の写真)という、ポーランド最後の王様の夏の離宮として、まるで水面に浮かんでいるかのように建てられた宮殿が、とてもきれいでした。

それから国立博物館に足を運ぶと、ちょうど CHOPIN — IKONOSFERA ROMANTYZMU が開催



中で、ポーランド語か英語の音声説明が5ズウォティだというので、今度はちゃんと英語のを入手しました。

展示物は絵画が中心で、Persons の区画はショパンをめぐる人たちの肖像画、Places はショパンが住んだ場所の写真や絵画（パリが多かった）、Landscapes はロマン派風景画……とすすんでいき、最後の一画は Chopin Legend で、ショパン臨終の絵画（ベッドの脇に茶色いアブライトピアノが置かれ、天使のような女性が立ったまま鍵盤を押さえている図など）やデスマスク等、死をモチーフにしていました。

付随の音声説明なのですが「展示物何番の絵画は……、そして何番は……」と随時指示があるのに、なんと肝心の展示物に番号が振ってないんです！ でも、今言ってもすぐには直らないと思って、説明から探し当てたり当てなかったりしながら適当に見て回りました。が、黙ってないで言ったほ

うがよかったかもしれません。このようにあきらめて黙っている旅行者が積み重なっては、いつまでたっても直りませんから。¹²

ワルシャワはバスや市街電車も発達していますが、私はてくてく歩きまわって、この日はかなり足が疲れました。翌日はもう帰るだけで、ワルシャワ空港（愛称ショパン空港）から初めて格安航空会社の便に乗ってローマに飛びましたが、面食らったのは座席指定がないことぐらいで、飲食物の機内販売は合理的ですし、これで6000円もしないならすごいと思いました。

4. 終わりに

旅とはこのようにして、うまくいかないことも多く、方向転換を余儀なくされることもあり、臨機応変や失地回復に努めなければなりません。しかしながら、学会発表だけでも有意義なのですから、訪れた地での観光はついでに楽しんでくると思えば、失敗についても気が軽くなるというものです。そもそも旅行は、失敗や損、効率の悪さ、といったことから免れることはできないのですから、それらも含めて総合的に貴重な体験とするしかありません。

今回2つの学会で、リトアニア語とポーランド語を次のように持論に組み入れることができ、大きな収穫でした。ここでは論証はせずに主張だけ記しておきます。

動詞の素性と動詞移動の関係

時制	呼応	法	+	の数	
+	+	+	3		リトアニア語とポーランド語ですべての動詞が動く
		+	2		ポーランド語の仮定法で <i>by</i> + 呼応語尾が動く
+	+		2		英語の直説法で <i>be</i> と完了の <i>have</i> だけが動く
		+	1		英語の仮定法でどの動詞も動かない
+			1		英語の命令法でどの動詞も動かない

そして今、私は次の学会に向けて動き始めており、オランダのアムステルダム大学で12月に行なわれる *Verb Movement: Its nature, triggers, and effects*（動詞移動 — その本質、誘因、効果）に *Mood, Features, and Verb Movement*（法と素性と動詞移動）と題して応募したところです。指導教授夫妻から、その

学会はたとえ審査に落ちても聴きに行きなさいと言われましたが、落ちたらショックで……。晴れ舞台はなくても、これだけ狭い研究テーマ — こんな学会が私の在欧中に開催されるなんて — を共有する人たちと触れあってくれるだけで有意義だろうとは思いますが。

アムステルダムは若いころに行ったことがあり、レンブラントやゴッホの美術館もさることながら、胸の詰まる見どころとして「どう？ これが私たちの素晴らしい隠れ家です!」(アンネ・フランク) が圧巻です。あれは、もう一度見に行く価値があります。それではもう、採否の通知¹³ がくる前に、航空券の手配をすることにいたしましょう。

注

1. 私が読んだシエナに関する本は、次の2冊です。
石鍋真澄 (1988)『聖母の都市シエナ — 中世イタリアの都市国家と美術』吉川弘文館
池上俊一 (2001)『シエナ — 夢見るゴシック都市』中公新書
2. 私が若いころから親しんでいる彼らの著書は次の2冊です。
Belletti, Adriana (1990) *Generalized Verb Movement*, Rosenberg & Sellier, Torino.
Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
彼らの最近の著作は、次の通りです。
Belletti, Adriana (2009) *Structures and Strategies*, Routledge, New York and London.
Rizzi, Luigi and Guglielmo Cinque (原稿) "The Cartography of Syntactic Structures"
3. 第二の理由は、私は日本でもご飯を炊くよりパスタをゆでるほうが圧倒的に多いイタリア料理好きだからです。期待にたがわずイタリアの食料品店の棚は、さまざまな形や長さのパスタが、500グラム100円もせずに、袋入りや箱入りで鈴なりになっています。そしてもちろんキャンティ地方の赤ワインや近隣の町サンジミニャーノの白ワインを始め、よりどりみどりのワインが手に入ります。
ここへ来て最も気に入った料理は「パンツァネッラ」というパン入りサラダで、古く硬くなったパンをちぎったものに、細かく切ったトマト、セロリ、玉ねぎといった野菜を混ぜ、ワインビネガー、オリーブオイル、塩、香辛料などで味付けされているようです。パンツァネッラは夏のお昼にぴったりでしたが、冬場は同じ古パン再利用料理でも「リポリータ」という野菜と豆を煮込んだ上にパンを加えたスープのほうがおいしく感じられることでしょう。シエナのメイン料理はやはり魚よりも肉が充実しており、変わったところでは、ウサギのトマト煮や猪ひき肉のミートソース+幅広パスタが美味です。
シエナにはまた、中世修道院以来の伝統銘菓が2つもあり、ひとつは「パンフォルテ」という、何種類ものナッツ、砂糖漬け果物、香辛料などを、小麦粉、酵母、蜂蜜

などをつなぎにして、大きいものは直径30センチ以上の円形に焼いた「シエナ版月餅」で、硬いので薄く切って食べます。少し葉っぱのような味がしないでもないので、私は「リッチャレリ」のほうが好きです。これはアーモンドの粉と蜂蜜を主な材料とし、厚さ1.5センチぐらいの楕円形に焼いて粉砂糖をまぶしたもので、しっとりさくさく、万人向けの甘いお菓子です。

4. 日本語はどうでしょうか。

(i) a. 太郎はいつも花子を愛する。

b. 太郎は花子をいつも愛する。

どちらでもいいですね。では、ギリシア語型？ 私には何とも言えません。リッツィ教授からも日本語の動詞移動はやらないのかと言われましたが、この理論は欧州諸語に当てはめてこそうまくいくのであり、日本語は私の母語なので客観的に観察したり分析したりすることができないのでやりません、というのが私の逃げ口上です。

5. Murakami, Madoka (村上まどか) (1992) "From INFL Features to V Movement: The Subjunctive in English" ハワイ大学マノア校修士論文

6. 櫻井映子 (2007)『ニューエクスプレス リトアニア語』白水社

7. 「ボズナン」と「ボズナニ」は、お好みでどちらでもいいと思います、どうせ東ヨーロッパ語の語尾の母音なんてものは七変化するのですから。ウィキペディアによれば:「ボズナン暴動とはポーランド西部の都市ボズナンで1956年6月28日に起きた大衆暴動。ボズナニ事件ともいう。1956年2月に、ソ連共産党20回大会で、党第一書記フルシチョフはスターリン批判の演説をおこなった。この演説は、ソ連のみならず東欧諸国に衝撃を与えた。ポーランドでもスターリン主義のもと……大きな苦難を強いられていたが、……6月28日にはボズナンの人々がデモ行進するに至る。政府はデモに対して強硬策に出たことから、最初は穏健だったデモが暴徒化し商店や警察・刑務所などを襲撃。午後になって軍隊が投入され、暴動は鎮圧された。死傷者は100名を超えると推定されている。」

8. 石井哲士朗、三井レナータ (2008)『ニューエクスプレス ポーランド語』白水社
塚本桂子 (2008)『よくわかる現代ポーランド語文法』南雲堂フェニックス

9. Migdalski, Krzysztof (2006) *The Syntax of Compound Tenses in Slavic*, ティルブルク大学博士論文、オランダLOTシリーズ

10. この写真はイタリアで見た、とあるレストランのトイレの掲示ですが、自動翻訳を鵜呑みにせず誰かひとり日本人に確認していればこんなことには……。 (念のために訳すと、「お手ふき用の紙をトイレに流さないでください」の意。)

11. 中央駅から徒歩3分の「日本館」は、ランチは定食がお得とガイドブックに書いてあったので、店に入るまでそれで済ませ

BITTE NICHT SIE DIE CHARTA FÜR DIR HÄNDE IN

破棄しないでください憲章の手のための内閣に

ПОЖАЛУЙСТА, НЕ БРОСАТЬ БУМ

ようと思っていました。お店は内装や雰囲気が、ここは日本? という錯覚に陥り
そうなほどよく出来ていて、メニューを眺めるうちに、定食ではなく好きなもの
をアラカルトで食べたくなくなってしまい、結局、鮪の山かけ、冷ややっこ、イクラ
の軍艦、そしてざる蕎麦を、日本酒の友としてしまったのです。半年ぶりの和
食を、盛り付けも味も、海外でここまで出来るのかと感嘆しながら、ひと口ひと
口しみじみと味わいました。(これで蕎麦湯やお茶が自動的に出てきたら完璧に日
本でしたが、それはありませんでした。) お勘定は日本式にチップは払わないで
104ズウォティ (1ズウォティ=約28円) 也 — 昼食にそんなに払ったのかと思うど
ころか、こんなに安いならもう少し頼めばよかったとさえ思いました。

12. 開催2、3日目のことでしたが、こういった不手際にはイタリアに住んでいると驚
かなくなってしまう。ポーランドはどうなのでしょう。ポーランド語版で
も同じことでしょうか、ポーランド人が早く文句を言ってくればよかったの
ですが。
13. 神様、ありがとう! アムステルダムに「どう? これが私の素晴らしい動詞移動
の解決方法です!」と発表しに行くことになりました(11月9日通知、12月11日終了)。